

着物と私(13)

「非日常への憧れと現実」

木下 夏希



小さい頃から、着物や振り袖を着ている人を見るのが好きだった。いつもの洋服の時とは違って歩きづらそうだし、帯で締め付けられて大変そうだけど子供ながらに、着物の美しさには憧れがあった。紺や桜色、水色、カラフルな色に様々な色の花が描かれてあって、昔の人は当たり前に着ていたけど、非日常を漂わせる雰囲気も私にとって魅力の一つだったのかもしれない。

当然、七五三の時はいつもとは違う格好が出来るワクワクしたし、お正月や夏祭りでも着物や浴衣を着たかった。記憶のほとんどが、下駄が歩きづらいつか帯が苦しいという幼稚な物であるから恥ずかしい。

唯一まともに記憶として残っているのが二十歳の成人式だ。TVで綺麗なお姉さん達が振り袖を着て参加する行事がついに自分にも回ってきたと内心凄く嬉しかった。ただ現実はそのなかに自分の思っているようにはいかない。髪型はどうするかだ。ボブで少し大きめの花を頭につけようと考えていたが、身長や振り袖の柄の位置を考えると全体的なバランスが悪い。悩んだ末、髪型はアップにする事にした。そこから成人式までの半年間ほど髪の毛を伸ばさなければならない。自分で決めた事とはいえ、必然的に髪を切る事が出来なくなる。『十五少年漂流記』や『ガリバー旅行記』など、冒険ものの本でどきどきするのが好きだった私は、立ち入り禁止の区域に入りたくなる心理と



同様に、切っては駄目だと思うほど切りたい衝動に駆られる。結局優柔不断だったので、髪の毛をアップに出来る最低の長さを保ち続ける事しか出来なかったけれど・・・当日、アップのために大量のピン止めとスプレーで髪を固めなければいけないことになったのは大変だったけど今では良い思い出。

たまにしか着る事がないから色々悩むのならば、次の機会を待たずに、着付け教室に通って着物を非日常から日常の一部にしようかと思う。



きのした なつき (英米語学科4年次生)